

# カマラシーラの修行道論

早稲田大学大学院文学研究科

博士後期課程 5 年 佐藤 晃

## <目次>

### 第 1 部 研究篇：カマラシーラの修行道論に関する研究

#### 第 1 章 序論

#### 第 2 章 観における無自性性論証と無分別知の生起及び断惑との関係性

#### 第 3 章 縁起性論証因に基づく無自性性論証の位置付け——特に不生性論証との関連性について——

#### 第 4 章 ヨーガ行者の直接知覚による対象認識

#### 第 5 章 修行道論における菩提心の位置付け——カマラシーラ以降の修行道論の展開を視野に——

#### 第 6 章 結論

### 第 2 部 資料篇：\**Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa* 校訂テキスト、及び、試訳

---

本研究の第 1 部では、8 世紀後半に活躍した、後期中観派、特に瑜伽行中観派を代表する論師であるカマラシーラ（Kamalaśīla, ca. 740–795）を取り上げ、彼が提示した修行道論に関し、その根幹となる、真実なる事柄（＝一切法無自性性）を正しく認識する過程（特に止観双運道）の理論的側面（第 2 章から第 4 章）、及び、彼の修行道論の後代における受容・展開に関する思想史的側面（第 5 章）について考察を行った。そして、第 2 部では、直接的には第 5 章と関連するが、カマラシーラ以降、彼の論書に基づき著された\**Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa* の一部ではあるが校訂テキスト及び試訳を提示した。以下、各章の概要を記す。

### 第 1 部 研究篇：カマラシーラの修行道論に関する研究

#### 第 1 章 序論

第 1 章では、まず第 1 節で、本研究で取り上げるカマラシーラの思想的背景及び彼の

著作を整理した。前者に関しては、彼が属したとされる瑜伽行中観派における①瑜伽行唯識思想の摂取とそれとの融合、②仏教認識論（知覚論・論理学）の受容、③チベット仏教への影響という三点を整理した。後者に関しては、これまで学会において彼自身の著作として認められている著作を、①自著、②シャーンタラクシタの著作に対する注釈書、③經典類に対する注釈書に分類し、その内容と研究状況について概観し、整理した。その上で、本研究で主に扱う、*Bhāvanākrama* (BhKr)、及び、*Madhyamakāloka* (Māl) については別途項目を立て、少しく詳しく述べた。

第2節では、本研究の構成を提示し、第2章以降の各章で考察する問題の所在を整理した。

## 第2章 観における無自性性論証と無分別知の生起及び断惑との関係性

まず第2章では、修行道の特徴付ける止観双運道のうち、後者の観 (*vipaśyanā*) における無自性性論証が、その修行道の中において具体的に如何なる働きを為しているのか、という点について、その果報との関係性に関する検討を通して考察を行った。

その観の①定義、②特徴的な在り方、そして、③修行道において観を為す目的は以下のように整理される。

### 【①定義、②特徴的な在り方、③修行道上の目的】

- ① 真実に関する諦観 (*bhūtapratyavekṣaṇā*)
- ② 真実に関する洞察 (*bhūtanirūpaṇāvikalpa*)、理に従う作意 (*yoniso manasikāra*)  
として限定される分別 (概念的対象認識)
- ③ 真実の現証 (*pratyakṣīkaraṇa*) の生起

上記②のように、観とは真実なる事柄を認識対象とした概念的対象認識である。そして、その観を含む止観双運道の直接的な果報としては、③真実の現証の生起がある。これは、無分別なる知 (*avikalpasamyakjñāna*)、あるいは、正知たる光明 (*samyagjñānāloka*) の生起等と言い換えられる。また、その無分別知の生起を前提として、間接的な果報としての断惑 (*āvaraṇaprahāṇa*) があるとされる。

まず断惑について、その断じられるべき煩惱の生起と断滅の次第を *Bhāvanākrama-I* (BhKr-I) の記述を中心に検討した。それは次のように整理される。

### 【BhKr-I における煩惱生起・断滅の次第】

<煩悩の生起>

疑惑 → 誤分別 → 顛倒=無明 → 貪欲等の諸煩悩

<煩悩の断滅>

～疑惑 → ～誤分別 → ～顛倒=無明 → ～貪欲等の諸煩悩

ここで特徴的な点として以下の二点を指摘できる. ①諸煩悩の生起に関する直接的な原因として、無明 (avidyā) を自性とする顛倒 (viparyāsa) が指摘される点、そして、②それに先立って、誤分別 (mithyāvikalpa)、疑惑 (saṃśaya) が置かれる点である. 特に②に関しては、BhKr-I を引用していると考えられるハリバドラ (Haribhadra, ca. 8<sup>th</sup>–9<sup>th</sup>) の *Abhisamayālaṃkāra* (AAĀ) では、疑惑の箇所がすべて顛倒に置き換えられており、カマラシーラが提示した煩悩論が、後代そのまま受容されていない点を指摘することができる.

上記の煩悩生起の次第において、その最初に位置付けられる疑惑とは、勝義としてはその存在が認められない一切法に関して、それらの存在性を疑う (astitvasaṃśaya)、誤った認識である. この段階では「一切法が存在するかもしれない」と疑っている段階であり、完全に誤って「一切法が存在する」と認識しているわけではない. しかし、その疑惑が強まるにつれて、本来は存在しないはずの一切法をあたかも存在するかのごとくに構想したり (bhāvavikalpa)、あるいは、その一旦存在すると構想されてしまった一切法を否定したりする (abhāvavikalpa) 誤った分別 (mithyāvikalpa) が生じる. そして、この誤分別が強まるにつれて、ついには一切法の存在性に関する完全に誤った認識、つまり、顛倒 (viparyāsa) が生起する. そして、この顛倒は無明 (avidyā) を自性とする とされ、この顛倒すなわち無明を直接的な原因として、諸煩悩が生起する.

以上が BhKr-I に見られる煩悩生起の次第であるが、一方、その煩悩の断滅の次第は、疑惑、誤分別、顛倒 (=無明) という順で断じられることで、その結果である諸煩悩の生起が断じられる、となる. カマラシーラはこの断惑の前提として、止観双運道のもう一つの果報である、無分別知の生起があるとする. ではその無分別知とは何か. それは、疑惑を原因とした誤分別が悉く断じられた境地において生起する、ヨーガ行者の知である.

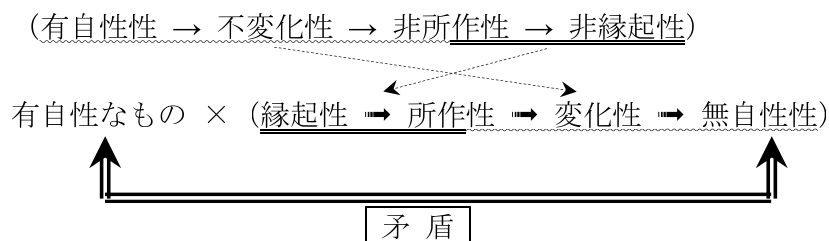
以上の検討から、観における無自性性論証の修行道における働きは、煩悩生起の起因として位置付けられる疑惑を断じることにあると言える. つまり、推論に基づき一切法無自性性を観察し、その真実なる事柄を決定することで、一切法の存在性に対する疑惑

を断つのである。そして疑惑が断じられたならば、その結果である誤分別も断じられ、そのとき無分別知が生起し、それに基づいて顛倒＝無明が断じられ、ついには断惑が得られるのである。

### 第3章 縁起性論証因に基づく無自性性論証の位置付け——特に不生性論証との関連性について——

第3章では、思所成慧を起こした段階での論理(yukti)及び修所成慧を起こした段階での観(vipaśyanā)の実質的な内容となる無自性性論証に関して、特に縁起性を論証因とした論証(＝縁起性論証)を取り上げ、論理的観点における考察を行った。実に、この縁起性論証は、中観派の祖とされるナーガールジュナの *Mūlamadhyamakakārikā* XXIV.18 にその祖型を求めることができ、中観派においては特別な意味を持つ論証と言える。ところが、BhKr-I 等で修行道論が提示される際、この縁起性論証は提示されない。そこでは専ら、不生性論証、あるいは、離一多性論証が提示される。では、上記の縁起性論証は修行道において如何なる役割を有し得るのか。本研究ではこの問題点の解明の足掛かりとして、Māl における縁起性論証それ自体の論理構造の解明を行った。まず Māl における縁起性論証の分析を行った。続いて、周辺の不生性論証が縁起性論証の遍充関係確定に対し、反所証拒斥認識根拠の提示という役割を担っている可能性について、その一例を検討した。

Māl における縁起性論証の理論構造は以下のように図示される。カマラシーラは、この議論の中で、縁起性と有自性性との両立を主張する論敵を想定するが、その論敵説を前提として議論を展開する。そして結論として、不変化する自性を有したもの(＝有自性性)は不変化する自性を有し得ない(＝無自性性)、という矛盾を論敵に対して突きつける。



上記の矛盾は、縁起性と有自性性が両立し得るという、論敵の誤った仮定に基づき導



かれた帰結である。よって、この矛盾が指摘されることにより、その前提となる有自性なものが縁起なるものであるという可能性は否定され、同時に、縁起なるものは無自性なるものである、という定説者の主張が確定される。以上の一連の議論に基づき、縁起性論証因における不確定論証因の過失は排除される。なおカマラシーラは、縁起性論証の遍充関係を確定する論拠が反所証拒斥認識根拠であると明言するが、それは有自性なるもの（＝無自性性と反対の特性を有するもの）において縁起性（＝論証因）を拒斥する非所作性であると指摘できる。

以上の分析を踏まえ、さらに不生性論証が縁起性論証の遍充関係確定に関与する論証であることの一端を、四不生性論証中の第一である自不生性論証を取り上げて考察を行った。その自不生性論証の骨子は以下の通りである。

原因となる事物×（[結果を本性とする  $\cap$ ] t1 において既に成立している  $\rightarrow$  結果と区別が無い  $\cap$  t1 において結果の本性も既に成立している  $\rightarrow$  t2 においてそれ自身を生起させる必要が無い）

ここではサーンキヤ学派の因果論、すなわち、根本原質（pradhāna）から諸原理が転変すると説く因中有果論が批判対象とされる。ゆえに、上記図式の「原因となる事物」とは、根本原質が意図されていると言える。そして、その根本原質は、定説者からは有自性なものと指摘される。また、後期中観派では、事物の生起は縁起に集約される。したがって、上記自不生性論証は、有自性な根本原質を原因とした場合の縁起性の否定が論じられているとすることができる。すると、上記の論証は、縁起性と無自性性の遍充関係の対偶を論証したことになるため、それを論拠に縁起性と無自性性の遍充関係を確定することができる。以上の考察から、少なくとも自不生性論証に関しては、縁起性論証の遍充関係を確定するための論理的根拠、すなわち、反所証拒斥認識根拠を提示する論証であると指摘することができる。なお、その場合、有自性なものにおける縁起性を拒斥している根拠は、t1 における結果の本性の既成立性ということになる。

## 第4章 ヨーガ行者の直接知覚による対象認識

第4章では、前の第2章・第3章で検討した推論と共に、仏教認識論において妥当な認識根拠の一つとされる直接知覚による一切法無自性性の証得に関して検討を行った。第2章で確認したように、止観双運道の果報として、ヨーガ行者において無分別知が生

起するとされる。この無分別知は、真実なる事柄の現証つまり真実なる事柄を直接知覚することと言い換えられる。第4章では、そのことが、思所成慧、修所成慧（＝止観双運道）という、推論という概念的対象認識を含む段階を前提とする点を確認した上で、概念的対象認識からそれを離れた直接知覚による対象認識に至るヨーガ行者における一連の対象認識が如何なる理論に基づき、その整合性が保持されているのか、という点について、カマラシーラの議論を検討対象として考察を行った。

まず Māl における対論の分析を行い、カマラシーラが、その対論における論敵の見解（≡ダルマキールティ説）をあくまでも世俗の領域での直接知覚による対象認識の理論と見做し、一方で、一切法無自性性という彼らにとっての真実なる事柄を認識対象とする、仏等の偉大なヨーガ行者の直接知覚による対象認識に関しては別の理論を考えている点を指摘した。

ではその偉大なヨーガ行者の直接知覚による対象認識に基づくところの理論とは如何なるものか。この点については、*Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) 第26章、及び、第16章の議論を検討した。カマラシーラは、直接知覚が認識対象の独自相を対象領域とする、という仏教認識論における定義を踏襲しつつ、ヨーガ行者の直接知覚に関してはその対象領域を「異類から除外された独自相」と解釈し直す。この「異類から除外された独自相」は、実質的には、概念的対象認識である推論の対象領域、つまり、認識対象の一般相であると指摘でき、またカマラシーラ自身もそのことを認めている。つまり、カマラシーラは、ヨーガ行者の一連の対象認識における対象領域に関して、上記の「異類から除外された独自相」という概念を用いて認識対象の一般相と独自相との会通を図り、そのことによって、ヨーガ行者における一連の対象認識が整合性を持ち得ることを示そうとしていると言える。

以上を踏まえ、カマラシーラが考える、ヨーガ行者における一連の対象認識を整理すると以下ようになる。まずヨーガ行者は、概念的対象認識に基づく真実の観察を含む、思所成慧及び修所成慧の観において、一切法における一般相としての無自性性をその第一義的な認識対象として証得する。この時点では、異類である有自性なものから除外された無自性なものそのもの、つまり、独自相はあくまでも間接的な認識対象として位置付けられる。そして、ヨーガ行者の修習が極限に至り、その極限を超えたとき、彼の知には認識対象である無自性なる在り方のみをもった一切法そのものが明瞭に顕現する。この時点においてはその認識対象に関して全く分別作用の働かない、つまり、無分別なる知が生じることとなる。カマラシーラが、対象の明瞭な顕現を根拠に主張する、ヨー

ガ行者の直接知覚による一切法無自性性の証得とは、以上のようなプロセスを経て、ヨーガ行者の知が生起することであると考えられる。

## 第5章 修行道論における菩提心の位置付け——カマラシーラ以降の修行道論の展開を視野に——

カマラシーラが BhKr を初めとする数編の論書において提示した修行道論は後代において広く受容された。このことは種々の文献にパラレルが確認されることから知られる。しかし、あらゆる思想体系に指摘し得ようが、それが後代に受容されていく過程において、何らかの変容・改変は必ずついて回る。第5章では、カマラシーラの体系が如何に受容され展開されたのか、その一端を明らかにする目的で、菩提心 (bodhicitta) の議論を取り上げ、検討を行った。

本研究では、菩提心を誓願心と発趣心に分類する伝統を継承するカマラシーラが、後者発趣心に関して特徴的な定義を示していること、そして、その定義が後代において改変され、別の体系の中に組み込まれている点を検討した。その際、カマラシーラが BhKr-I を中心に示す議論と、9世紀から10世紀にかけて活動したと考えられるジュニャーナキールティの *\*Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa* (PYBhKrU) の議論との比較を行った。

カマラシーラが BhKr-I において示す修行道論は、幾つかの枠組みによって構成されるが、その一つに方便と智慧の双運という枠組みがある（なお、聞思修や止観双運道等の枠組みは後者の智慧を構成する）。さらにそれは、大悲・菩提心・実践という大枠のうち、実践を構成しているものである。カマラシーラは上記の発趣心を、この方便及び智慧から成る実践に邁進する際の精神的拠り所として位置付ける。しかし、カマラシーラの定義では、発趣心が方便と智慧の両者に関連付けられるのか、あるいは、智慧のみに関連付けられるのか、という少なくとも二通りの解釈の可能性が残る。

一方で、ジュニャーナキールティの PYBhKrU が示す修行道も、BhKr-I で示されるそれと同様に、大悲・菩提心・実践という三点により構成される。しかし、両者で説かれる菩提心の理解には大きな相違点がある。それは、両者ともに菩提心を誓願心と発趣心という二種類に分類する点では共通するものの、PYBhKrU では前者誓願心を三種類に、後者発趣心を十九種類にさらに分類する。つまり菩提心は最終的に二十二種類に分類される。そして、行者において何れの菩提心が生起しているのかによって、その行者の修行道における階梯が示される。誓願心のみが生起している段階は初習業地である。そし

て、発趣心が生起している段階には、信解行地から仏地までが含まれる。このように PYBhKrU においては、修行道の全階段が菩提心によって説明され尽くされるわけである。このことは、菩提心の修習が仏地という修行の最終段階に至る原因として見做されていることを意味すると指摘できる。しかし一方で、方便と智慧の双運がその仏地へ至るための原因であるという言明もある。このように、PYBhKrU においては仏地に至るための原因として、菩提心の修習と方便と智慧の双運との両者が説かれていると言えるが、同時に、その両者が如何に関連付けられるのかを示す必要もある。本研究では、PYBhKrU においてその両者を関連付ける理論として、カマラシーラが BhKr-I で提示した発趣心の定義が改変され、その上で活用されていると考え、その点を考察した。

上述の通り、カマラシーラは発趣心を方便と智慧から成る実践に邁進する際の精神的拠り所として定義する。一方で PYBhKrU においては、その発趣心は布施等の資糧 (saṃbhāra) の獲得に向かう際の拠り所として定義される。ここで注意されるべきは「布施等の資糧」である。この布施等とは、智慧に対する方便の中に含まれる。このことから、発趣心は直接的には方便と関連付けられていることが確認される。そして、智慧は布施等が完成する、つまり、波羅蜜となることを確定する原因として位置付けられることから、それが発趣心と間接的に関連付けられている点を確認される。

方便と智慧が完成した段階は布施等の九波羅蜜と智慧波羅蜜が完成した段階とされ、菩薩の十地とされる。そして、これがその後の階位（菩薩地の勝進道及び加行道、そして仏地）に対する因位となる。この意味において、方便と智慧の双運は仏地に至るための原因と言われるのである。そして、それは発趣心の議論の中に含まれており、発趣心は方便及び智慧のいずれとも密接な関連を持っているわけであるが、しかし、それぞれとの関連性には上述のような差異が認められる。

この PYBhKrU において確認される議論は、カマラシーラが提示した発趣心の定義を部分的に改変することで、カマラシーラの BhKr-I では不明瞭な点を残した発趣心と実践（方便・智慧）との関連性に関してより明瞭な理解を示そうとした、後代論師の一つの解釈であるとも言えよう。そして、この議論は、さらに後のサハジャヴァジュラの \*Tattvadaśakaṭikā の頃に至ると、さらに整備された形となる。

## 第 6 章 結論

第 6 章では、以上の各章で考察した内容をまとめ、また、今後に残された研究課題に

について言及した。ここでは今後の研究課題について述べる。

まず第2章から第4章にかけては、修行道の根幹とされる止観双運道に関する理論的側面を検討したが、これに関する今後の課題は少なくない。まず第2章・第3章では、推論という概念的対象認識に関する考察を行った。第2章では特に煩惱論について検討を行ったが、これに関しては後述する。第3章では、無自性性論証の一形式である縁起性論証を取り上げ、その分析を行ったが、本研究では自不生性論証が縁起性論証の遍充関係確定に寄与し得る点を考察したのみで、他の不生性論証との関連性を具体的に検討するには至らなかった。この点は今後の検討課題である。さらに、縁起性論証が BhKr 等の修行道論を扱う論書において言及されない点が明らかにされなければならない。つまり、修行道という場において、縁起性論証が如何なる役割を有し得るのかは、この論証の存在意義を問う大きな問題となる。次に第4章では、ヨーガ行者の直接知覚に関して、それが概念的対象認識を含む段階（思所成慧、止観双運道）を前提として生起する点に関する問題について、カマラシーラの議論を検討対象に考察を行ったが、この問題は仏教認識論を前提とする同時代の諸論師に共通して解答が求められた難問であった。カマラシーラはその一解答例を示したに過ぎない。しかし、なぜ彼はそのような解答を出さなければならなかったのか、その必然性は問われなければならない。この点の解明には、カマラシーラの議論を整理した上で、周辺諸論師の議論との比較・検討を要すると考える。

次に第5章では、カマラシーラが示した修行道論の後代における受容と展開に関して、その一例として菩提心の議論を扱った。本研究では誓願心と発趣心の二種類に分類した上で展開される議論を考察対象としたが、菩提心には世俗菩提心と勝義菩提心の二種類に分類する議論等、後代の展開は幅広い。なお、カマラシーラには後者の分類について言及する BhKr-II がある。前者の議論と後者の議論が彼自身において如何に結びついているのか、という点も今後明らかにされるべき課題である。本研究では菩提心の議論を取り上げたが、それはカマラシーラ以降の諸論師による彼の議論の受容と展開を示す一例に過ぎない。例えば煩惱論に関して言えば、ハリバドラは AAĀ において、BhKr-I を引用しつつ著述した形跡が見られるものの、第2章で検討したカマラシーラの見解、すなわち「疑惑」(saṃśaya) を起因とした煩惱生起説に関して、その「疑惑」の箇所を意図的に「顛倒」(viparyāsa) と置き換えているように思われる。この場合、誤知に関する両者の見解に何らかの差異があることが予測される。

以上のように、今後に残された課題は多数あるが、カマラシーラ自身の修行道論のみ

ならず、その後の展開も視野に入れて、継続的な検討を重ねていきたい。

## 第 2 部 資料篇：\**Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa* 校訂テキスト，及び，試訳

本研究第 2 部では、第 5 章で扱った、ジュニャーナキールティ著\**Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa* (PYBhKrU) の一部ではあるが、その校訂テキスト，及び，試訳を提示した。本書はチベット語訳でのみ残存する、修行道を論じた小論である。著者であるジュニャーナキールティは、9 世紀から 10 世紀にかけて活動した人物であると想定できるが、この PYBhKrU はその全編に亘ってカマラシーラの BhKr の影響が確認できる。しかし、第 5 章で確認したように、菩提心の議論に関してはハリバドラ等の *Abhisamayālaṃkāra* 系統の思想を確認することができる。また、後のディーパンカラシュリージュニャーナの\**Bodhipathapradīpapañjikā* に引用されることも確認できる。以上の点からしても、本書はカマラシーラ以降の議論の展開を追う際の一資料となると考えられる。

今回提示したテキスト校訂及び試訳は、第 5 章で検討した菩提心の議論を中心とした部分的なものに留まる。全体の校訂及び試訳については、別途発表する予定である。